地域包括ケアを考える

地域包括ケアって何？

今までのボランティア活動とどう違うねん？

森口弘美（同志社大学社会学部助教）

地域包括ケアについて理解しようとするとき、いつも何か腑に落ちないものを感じてきた。厚生労働省が説明する高齢化という背景、そのために住み慣れた地域で自分らしい暮らしができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が提供されたらいいということは、否定のしようもないもっともな理路である。いやむしろ、否定のしようもないことだからこそ、「なぜ今になってわざわざそう言わねばならないのか」「今までの取り組みとどう違うのか」がとてもわかりにくいのである。

そこでここでは「ボランティア」という視点からこのシステムを捉え直してみようと思う。サブテーマは「今までのボランティア活動とどう違うねん？」である。

■地域包括ケアシステムの取り組み事例から

厚生労働省が地域包括ケアシステムについて説明しているウェブサイトでは、全国各地の取り組み事例が紹介されている。（http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/）

たとえば、東京都世田谷区の「都市部での医療・介護・予防・生活支援・住まいの一体的な提供に関する取組」を見てみると、医療と福祉の情報共有の仕組みを作るなどの専門職による取り組みのほか、高齢者の居場所づくり（喫茶店・大学等の活用）、中高年層ボランティアの活動促進（買い物支援等）といったボランティアによる活動例が紹介されている。

また、鹿児島県大和村の「住民が自ら考える互助の地域づくり」を見てみると、要介護者をマスターとして抜擢したご近所喫茶や、高齢者が作った野菜やその野菜で作ったお総菜を販売するといった、住民主体の活動例が紹介されている。

これらの個々の活動例そのものは、これまで全国津々浦々で行われてきたであろうボランティア活動と大差はない。それらのなかにはもしかしたら、「ボランティア活動」という認識さえなく、「一人の住民として当たり前の助け合い」という感覚でなされているものもあるだろう。

では、このようにこれまでボランティア活動や地域の助け合いに関わってきた人たちは、国が新しく提示してきた「地域包括ケアシステム」をどのように理解すれば良いのだろうか。

■システムとして機能すること

地域包括ケアシステムについて何度か勉強する機会を得ているうちに、私はようやくこのシステムの根幹にあるのは地域ケア会議にあると理解できるようになった。地域ケア会議とは、一つの支援困難ケースに関与する様々な専門職が集まって課題の解決に向けて持たれる会議、そうした会議で見いだされた地域の課題を共有するためにネットワーク構築を目的に小学校区レベルで開催される会議、さらにはそうした生活圏域だけでは解決できない社会資源の開発や政策形成に取り組むための市町村レベルの会議まで、さまざまなレベルでさまざまな目的でもって開催されることが想定されているものである。

ここで大事になるのが、これらさまざまな次元の会議がお互いに連携しあって「システム」すなわち「仕組み」として機能していくことである（実際には地域ケア会議が開催されていない自治体もあるし、うまく機能するところまでいっていない地域もある）。地域包括ケアシステムにおいては、この「仕組み」の一端にボランティア活動が位置づけられる。

■「仕組み」の一端としてのボランティア活動

これまでボランティア活動の多くは、それぞれ独自のやり方で個々バラバラに行われてきた。もちろん、活動団体どうしの交流や協力などは少なからずあっただろう。しかしながら、「任意団体」という言葉もあるように、どの程度地域の「仕組み」にコミットメントするかは任意であったと言える。今後もボランティア活動が任意団体であるということは変わらない。しかしながら「地域包括ケアシステム」が実現されていくにつれ、その活動がシステムの一部としてより良く機能することが期待されるようになっていくと考えられる。

このこと自体は歓迎すべきことである。というのも、ボランティア活動は計画的に作られた制度ではなく「任意」によるため、よかれと思って立ち上げた活動が、地域のニーズが思いのほか少なく先細りになったり、困りごとを抱えている人が使えるサービスを一生懸命探していたら、意外にもごく身近な住民の助けが得られたりと、需要と供給のアンバランスが生じることがある。ボランティア活動がシステムの一部として機能することは、地域全体にどのような課題があって、何をすることが効果的なのかを、個々の活動団体や担い手が意識できることを意味し、そのことは支える人・支えられる人双方にとって有益である。

昨年11月7日（土）に、奈良介護保険研究会主催の「地域包括ケア（地域の支え合い）をつくるには」（於奈良県社会福祉総合センター）と題したフォーラムが開催された。フォーラムの後半では、支える側ができることと、支えてもらいたい側のニーズを出し合い、マッチングがうまくいかない部分が何かを抽出するグループワークを実施した。このように地域や社会の全体像を意識しながら活動を展開することが、これからのボランティアには求められるのである。

■安易な下請けにならないために

ただし、ボランティア活動が「仕組み」の一端を担うことで注意しなければならないこともある。

ボランティア活動をはじめとした「互助」を頑張ることで「公助」の減退につながらないようにすることだ。需要の増大に見合う予算の確保に苦戦する「公助」の運用者にとって、「互助」は安上がりの支え手にもなり得る。「支え合いは良いことだ」「がんばろう」とかけ声ばかりを大きくして戦略のないまま「互助」を強化することは、「公助」の安易な下請けになってしまいかねない。

ボランティア活動は地域包括ケアシステムに位置づけられる重要な担い手であると同時に、地域で困りごとを抱えた人にとって最も身近な隣人であることから、地域の声なき声を「仕組み」に届ける使命をもつ。厚生労働省が唱える「住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができる」ような地域を実現するためには、「互助」が「公助」のあり方を決めていくような力をつけ、動きを作っていく必要があるだろう。

ヘルパーさん応援コーナー その23 最終回

高齢化社会でのヘルパーさんの役割

医学博士　中島孝之
（大和郡山市 中島医院）

日本の高齢者は平成27年3395万人、10年後には3657万人、総人口の３人に１人は６５歳以上、５人に１人は７５歳以上の超高齢化社会を迎えます。同時に４世帯に１軒は独居か高齢者のみの家庭となるとされています。高齢者の増加は、同時に介護を必要とする人の数が増えることにもなります。

政府の考えている施策はできるだけ自宅でというのが基本ですから、今後はデイサービス、ショートステイ、小規模多機能型施設といった、通所型サービスの必要性が高くなると考えられます。なかでもホームヘルプサービスは他のサービス内容が職員一人が複数の利用者に対応するのに対し、ヘルパーさん一人に利用者一人が原則ですから、10年で利用者が数百万人も増加すれば、ますます忙しくなることが予想されます。

このコーナーの第１回から見てきたように，ある限られた時間ではありますが、その家の中で起こったことに対して、全部に対応しなければなりませんので、時々コーナーを見直してください。のどに物が詰まった時、大きな怪我ややけどの時、時には亡くなっているのを見つけた時、食事を食べてくれない時等々、少しはお役に立てると思います。

「俚志（さとびごころ）」２号からはじまったこのコーナーは、第23回の今回で終了いたしますが、これまでの内容をまとめた小冊子とすることも考えております。

またいつかお会いできれば幸いでございます。長い間お読みいただいてありがとうございました。

森とともに生きる

吉野林業の一端を担う若手の思いに触れてみてください。

第3回

環境と経済を両立する自然に逆らわない森づくり

久住　一友（谷林業株式会社）

ヨーロッパ行きの目的

毎年ヨーロッパ各国で開催される大規模な林業機械展。中でも四年に一度オーストリアで行われる機械展（Austrofoma）は、タワーヤーダ等の架線系の集材機械が多く出展されています（コラム参照）。海外の林業機械に興味があり、吉野林業地で活躍できる機械を購入することが当初の目的でしたが、初夏に「近自然の森づくり」に出会ってから、その先進地スイスの森林を訪ねるのが真の目的に変わっていました。

近自然という考え方とスイスの森林

「近自然」は「Naturnaher」というドイツ語が語源で「自然に近い（近づく）」という意味があります。人が森に手を加える以上、それは全くの自然に戻りませんが「本来の自然に近づける」ことはできる、という考え方です。自然をよく観察し、その摂理に逆らわない森づくりをすることで、森林生態系の充実（環境）と作業コストの軽減（経済）を両立させられるのです。

スイスの森を案内してもらったのはフォレスターのロルフ氏。スイスのフォレスターは、3年の現場経験を含めた教育システムを受けて習得できる国家資格で、主に市町村に雇用される公務員です（スイスでは全公務員の身分保障はありません）。

最初に訪れたモミだけを植えた薄暗い林（一斉林）では、部分的に伐り開く場所（ギャップ）を作ることで発芽した広葉樹を育てていました（スイスでは家具や建具、薪やチップに広葉樹を使う文化が続いています）。林内に光が入りすぎることでブラックベリー（日本のクズやササのような性質）が繁茂するので、光の調整をして徐々に林相を変化させる手法を観察から見い出していました。他にも実験は小面積で行うこと、施業法を一律に揃えないことが重要だという話が出ました。

ブラックベリー

スイスフォレスターのロルフ・シュトリッカー氏（右）と筆者。フォレスターは人気の職業。

またハリケーン被害地では、多くのトウヒとモミの大木が倒れましたが、伐採して販売するのは被害木のみに留めました。「一気に光が入るとタモばかりが生えて他の樹種が侵入できなくなるので被害の無い大木は残した」という理由でした。現在スイスのこの地域では「タモ枯れ」が発生していますが、多数の樹種が育つ環境を作ったことで、タモが枯れても森林が壊滅することはありませんでした。

ロルフ氏　日々の努力

成功事例からは良い所ばかりを見て浮かれがちになりますが、そのための努力を聞けたことは大きな収穫でした。ロルフ氏が一番多く時間を費やすのが山林所有者や地域住民とのコミュニケーション。今回の案内途中に出会ったどの集落の人たちとも笑顔で挨拶や雑談する様子が印象的でした。スイスではフォレスターという職業が、なりたい職業の上位にランキングされていることにも納得です。

他にも、「近自然」の考え方を受け入れてもらえない所有者のところに何度も足を運んでいる話や、イタリアのピザ屋からの薪の注文が多くあるが採算が合わずどう改善するか悩んでいる話、林業の仕事のない夏場に林業会社の従業員の仕事確保のために近自然河川改修工事に予算を引っぱってきていたり、木材販売の市場開拓までしている話を聞きました。

ハリケーン被害から再生途中の森林。被害を逃れた大きな木を残すことで、光を調節し多様な樹種が天然更新できる環境に。

スイスの恒続林。収穫すること（伐採・活用）が、将来木や次世代を担う低木・天然更新稚樹が育つ環境づくり（造林・育林）に密接に関連していて、保続的な林業を可能にしています。

私たちの地域でどう森づくりに活かすのか？

「なぜ切捨て間伐をするのか？」「なぜ間伐は3割と誰もが言うのか？」「なぜ植林後の下草刈りが大変だと言いながら大面積を伐る（皆伐する）のか？」「なぜスギ・ヒノキ以外の木を『雑』と呼び刈り取るのか？」など、「昔からしてるから」「そう教えられたから」続いている慣習に「なぜ？」を投げかけることで新たな考え方、発想が生まれてきます。圧倒的に日本人に足りない思考かもしれませんね。

スイスの森林

持続可能な森づくりは森だけを見るのではなく、また一人で成立させられるものではなく、「森林所有者や地域住民、消費者を巻き込んでこそ成立していくこと」をロルフ氏から学びました。

林業の衰退の原因は、木を使う文化がなくなったのではなく、社会の変化、消費者のニーズと森づくりを併せる努力をしてこなかったからというだけなのです。ここを繋げないと持続可能な森づくりはできません。自分だけが得をすれば良いという考えを捨て、全てが得になるような考え方へとシフトすることで、良い森林循環をつくり、良い地域環境をつくり、ひいては良い社会を創っていくことが可能になるのではないかと帰路の機内で考えていました。

【谷林業】吉野の5大林業家のひとつ。中近世以来、現在の王寺町の大地主として山林管理を手がける。2011年、老舗でありながらベンチャー企業として「谷林業株式会社」と改称。若手人材の育成や、新規事業の立ち上げなどを展開している。奈良県北葛城郡王寺町本町 2-16-36　TEL0745-72-2036

Austrofoma2015

2015.10/6～8. オーストリア オーバーエスターライヒ州にて

良い仕組みだなと感じたことが二点。
①酪農と林業をする兼業林家が多く、どの家庭にもトラクターがあります。その動力を利用して牧草刈りや牽引車、また薪割り機やハーベスタを動かすシステムが普及しています。②架線の搬器（ワイヤー上を動き、木の上げ下しワイヤーの支点になる機械）に油圧システムを上手く組み込んで、山で使用するワイヤー量を圧倒的に減らすシステムが出来ていました。

多くの子どもやカップルが来場している

エネルギー利用するためのチッパー製造車

動物の食害を防ぐアイテム

大人が架線システムの模型に夢中

搬器の油圧システム

トラクター動力の活用

コミュニティライター　西久保　智美

⑮ 吉野杉・桧の木工房 エンゲルベルク社

井上 幸次郎さん

にしくぼ　ともみ ／五條市生まれ。団体の広報を経て、タイ国のドゥアン・プラティーブ財団でボランティア活動。帰国後、地元新聞社の記者として橿原、五條・吉野支局を担当。現在はコミュニティライターとして、工房街道推進協議会の広報や五條・吉野の地域の情報を発信している。

多武峰から吉野へ、古の時代から金峯山詣や花見のために通ったと伝わる竜在峠。その山裾に広がる里山に、吉野杉や桧の美しい木目を生かした木工品を作る工房がある。その名は、「吉野杉・桧の木工房　エンゲルベルク社」。この地で生まれ育った井上幸次郎さんが早期退職を機に、6年前に工房を開き、積み木や台所用品などの小物品から、机や椅子、麹蓋、ロッキングチェアーなど、さまざまな木工品を製作している。

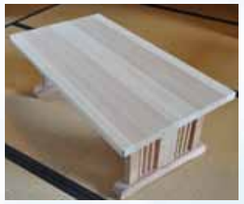
実家が祝い箸に使われる丸箸を製造していたことから、身近に帯鋸やモルダー（自動多軸鉋盤）、プレナー（自動鉋盤）などの専門機械があり、木と共に育った井上さん。「私たちが子どもの時分は、家業の手伝いが当たり前で、そんな環境からか吉野材の美しさを生かした木工品を作るようになりました」。学校や家業の手伝いの合間をみつけては、独学で木を使ったものづくりを始めた。

長年、趣味の範疇だった井上さんの「木のものづくり」に転機が訪れたのは、今から10数年前のこと。お孫さんの誕生の記念に、吉野桧で木馬を製作したのがきっかけだった。「孫に喜んでもらおうと図面を引き、試行錯誤しながら初めて作ったのですが、予想以上にうまく仕上がり、吉野桧の材質の良さも表現できました。何よりも孫が大きくなるまで、ずっと木馬に乗って遊んでくれたのがうれしくて、ものづくりの醍醐味を感じました」と話す。

この経験から井上さんは、建築材として活用されている吉野杉や吉野桧を、身近な木工品という形で表現できないだろうかと考えるようになったとか。もともと機械工学を学び、油圧ポンプやバルブの設計製図をしたことがあったので、木工品も図面を描き、忠実に部品を作って組み立てたら、できるのでは、と思ったそうだ。いろいろと構想を練っているとアイデアがどんどんわいてきて、退職まで待てなくなった井上さん。加工に必要な10種類の機械をそろえ、早期で仕事を辞め、工房を構えた。

基本、注文製作で、今まで依頼されたのは学習机や写経机、寄席で使う道具セットなどさまざま。お客様の希望を取り入れながら図面に起こし、材質の良さを活かすためにデザインはシンプルにする一方、身体とフィットする部分の曲線の出し方や強度にはこだわったそうだ。

また注文以外は、まな板やターナーなどの台所用品が人気で、特にターナーは大中小の大きさだけでなく、右利き用と左利き用とに分けて、6種類そろえている。「手作りなのでどんな状況にも対応できる、ものづくりをしたいと思っています。身近な所で、吉野杉や吉野桧の良さを知ってもらい、建築材として吉野材が多く使ってもらうきっかけになれば」と井上さん。吉野材の特徴を生かしたものづくりをこれからも追究し続けるそうだ。



【DATA】
吉野杉・桧の木工房
エンゲルベルク社
吉野郡吉野町志賀 1437
☎／FAX　0746-32-3548

「講」から地域自治を考える ⑨

近世における自治と宮座・講

北井　弘（フリージャーナリスト）

今回からは近世における宮座・講と村落自治の関係について考えていきたい。近世の範囲についても、中世と同様にいくつかの説がある。ここでは大まかに、太閤検地によって荘園制が全廃され、耕作者の権利と義務が明確になって農民支配の一本化が図られるようになってから、江戸時代末期までを近世と捉えておく。

権利としての地下請から義務としての村請へ

太閤検地とその後江戸幕府によって行われた検地は、荘園をめぐる複雑な権利関係を清算して小農の自立を促し、村請制度を媒介とする近世郷村のまとまりを生み出した。村請制度とは村単位で年貢を納める仕組みであり、検地で把握された村高に応じて村役人が村民から年貢を徴収し、領主に納める。

中世にも地下請（じげうけ）と呼ばれる、惣村が年貢の徴収・貢納を請け負う仕組みがあったが、これはどちらかといえば惣村が領主から勝ち取った自治権の1つであり、未納分を村で負担する責任はなかったとされる。

村請制度のもとでは、請け負うことが義務として制度化され、同じ村内の農民が年貢納入について共同責任を負うことになった。また、この制度の前提として村境が確定され（＝村切り）、物理的にも村としての独立性が高まる。さらに、キリスト教禁制が強化された17世紀中期以降は、宗門改と寺請制度のもとで宗教的にも統制が行われ、その流れの中で五人組が義務化される。

恩田守雄『互助社会論』は、「こうして村落組織は村役人（村方三役）による村全体の統治単位に加えて、村内の下部組織の『五人組』による連帯責任と相互監視に基づく二重統治体制が確立していく」と記す。こうした制度的変遷を踏まえて、中世から近世への村落共同体の位置づけを「強制的な自治組織と共生的な自治組織との緊張関係の歴史」と捉えているのも注目される。

農業生産力の増大が小農民の自立を促進

渡辺尚志『近世の村落と地域社会』は、農業生産や社会動態の側面から村落の変化を考察している。同書によると、水利灌漑・治水工事とそれに伴う耕地開発の進展、木綿作の普及、牛の飼育と厩肥の使用の一般化、さらには気候の温暖化などが、農業生産力の増大と家族小経営の自立をもたらした。

また、戦国期には年貢や加地子（荘園領主や国司に納める年貢とは別に在地領主に納める年貢のこと）の負担に耐えかねた農民の離村が相次ぎ、それは江戸時代に入っても続いたという。同書の次の記述は特筆される。

「当時は、どこの村でも、耕地開発や荒れ地の再開発のための労働力を必要としていたから、村も大名もこぞって優遇策を用意して他所者を招致したのであり、他所者招致の『才覚』こそが庄屋の『忠節』であった」

こうした状況と、兵農分離による侍衆の都市部への移住などが相俟って、近世郷村は相対的に自立した小農民を核として形成されていったと考えられる。ただし、もちろん中世の惣村がほぼそのままの形で引き継がれていった例も少なくない。

諸社禰宜神主法度で宮座の儀式にも統制

前述のように、江戸時代における寺院は宗門改のもとで幕府による農民統制の重要な一端を担うこととなった。一方、神社については、1685年に諸社禰宜神主法度を制定。伊勢神宮や春日大社などの二十二社を除いては吉田神道を正統と定め、そのしきたりに従うことを義務づけた。

安藤精一『近世宮座の史的展開』によると、この法度にそぐわない宮座の儀式を行っていた神社が問題とされた例がある。1797年には、奈良奉行が寺社奉行所に対して、一村の百姓が他村の百姓をいっさい立ち会わせず宮座と称して神事を行っていると訴えた。しかし、百姓の勝手のことで奉行所は関知しないと斥けられたという。（以下次号）

ドイツの地方自治

第14回：ドイツから見えてくる「自治」とは？

柳原　伸洋

ブレーメン市庁舎：建物と広場には長い歴史がある。
ドイツの自治をめぐる政治文化のシンボルともいえる。
撮影：Jürgen Howaldt（CC-BY-2.0）

■さいごに、自治とは？

今まで連載を重ねてきた「ドイツの地方自治」も、第十四回目の今回で最終回となります。第一回の「連邦参議院」という州（地方）を代表する議会制度の記事からはじまり、各回で自治体の独立性の事例などを、テーマに沿って説明してきました。最終回は、「ドイツから見えてくる『自治』とは？」という、やや抽象的ですが、ラストを飾るテーマに取り組みたいと思います。

まずは、こう問いかけたいと思います。そもそも「自治」とは何でしょうか。日本で自治と聞くと、おそらく「地方自治」を連想する場合がほとんどかもしれません。しかし、『大辞泉』を引いてみると、「一．自分や自分たちに関することを自らの責任において処理すること　二．地方自治の略」と書かれています（※1）。第一義には「自分（たち）に関わることを自ら行うこと」となっています。

■自己決定としての自治とその歴史

ドイツの場合、自治（Selbstverwaltung）の定義は、さらに細分化されています（※2）。そして地方自治は、そのカテゴリーのひとつになります。次に列記しておきましょう。

一．社会的な集団の自治（保険組合など）
二．政治的な自治（地方自治など）
三．職業的な自治（職業集団など）
四．文化的な自治（学校など）

日本では、「学校の自治」、たとえば「大学の自治」といっても、なかなか具体的にイメージしにくいのが現状でしょう。また、文化的な自治そのものがイメージしにくいかと思われます。本連載の第八回で扱った「ドイツの夏休み」をめぐる州の自己決定権は、文化的な自治の事例だといえます。

自治、もっといえば自己決定という考えは、ドイツやヨーロッパには長い歴史があり、「政治文化」（politische Kultur）として根付いているといえます。政治文化とは、共同体内での政治に対する態度や価値観などを意味します。歴史的には、自らが勝ち取ってきた権利としての「自治」、そして国家連合体や合併の際に譲れない権利としての「自治」といった二つの側面があります。たとえば、二〇一四年にはスコットランドの独立問題が浮上しましたが、これもまた歴史的背景をもったヨーロッパの自治をめぐる問題のひとつでした。

■生活と結びつく自治

今見たように、自治は歴史と深く結びついています。そして、現在の社会においては「生活」と深く分かちがたく関わっています。日本では「就活」「婚活」「終活」などなど、様々な「活動」がありますが、「生活」を第一とする活動をしているでしょうか（私も含めて）。「○○のために生活を犠牲にする」というような言葉をちらほら聞いたり、口にしたりします。ここで再び、「自らに関わることを自らの責任で処理する」という自治の意味に立ち戻ってみましょう。つまり、生活を「自己判断で犠牲にしているのか」、「会社などの組織や人間関係のために犠牲にしているのか」に大きな違いがあると思います。「自治」から捉えなおしてみると、自らのために自らの責任でどこまで判断できているのかが問題となってきます。

そして、自分自身の生活を優先するための「自己管理として自治」は、ダイレクトに生活に影響を及ぼします。長期休暇の事例などでもわかるように、生活を第一にする傾向の強いドイツの人びとからすれば、自治は最も合理的かつ迅速に生活を充実させる方策であり、それを手放すことの怖さもまた理解しているのではないでしょうか。

ただし、自治はそんなに素晴らしい面ばかりでもありません。本連載の第十二回目では「ペギーダ」といった移民排斥運動についても触れました。自治は、「自分（たち）」の範囲を線引きし、「内部と外部」を創り出す契機にもなりかねません。「外部に開かれた自治」は理想ですが、それほどたやすくは実現できません。そのためにも、他の自治の事例、たとえばドイツの事例を学んでいくことは重要なのです。

■本当に、さいごに

今回で、「ドイツの地方自治」は終わりです。次号以降は「ドイツの地域モノ（仮）」として、ドイツの地域性とモノの関わりについて書いていければと思っています。たとえば、日本でもよく知られるテディベアやバウムクーヘンなどの事例から、「モノと地域性との関係」を考えていきたいと思っています。次の企画も本連載が下地になっているので、今までの記事ともども、どうぞよろしくお願いいたします。

今までありがとうございました。Danke schön!!

※1　なお、ウィキペディアの項目「自治」も同様の定義が書かれています。これは、『大辞泉』などの辞典を参照したからだと思います。
※2　Wikipedia（ドイツ語）：Selbstverwaltung の項目より。

柳原伸洋 /1977 年、京都府相楽郡（現：木津川市）生まれ。東京大学大学院及び在ドイツ日本大使館調査員を経て、現在は東海大学文学部ヨーロッパ文明学科教員。著作はライター伸井太一として『ニセドイツ』（全３巻）や『ペンブックス　ロシア・東欧デザイン』（分担執筆）などがある。

家族野菜のある食卓

家族の笑顔のために作り継がれてきた伝統野菜を「家族野菜」と呼び、土から離れてしまった人と自然との関係を取り戻す「ちいさな農業」を提唱されているレストラン「清澄の里 粟」の三浦雅之さん・陽子さんにご協力いただき、季節のメニューをご紹介するコーナーです。畑を持たない人にも、そのエッセンスをわかちあっていただけたらと思います。（編集局　阿南誠子）

結崎（ゆうざき）ネブカと大和いものおやき

つくりかた

①１センチ大にネブカを切る。

②大和いもをすり、だし汁で伸ばす。

③紅しょうが、かつおぶし、①、②をよくまぜて、醤油を加える。

④フライパンに油を引き、両面をこんがり焼き色がつくまで焼く。

今回の大和伝統野菜【結崎ネブカ】

「ネブカ」とは、関西地方の葱の古称。かつては大和平野で広く栽培され、特に結崎村（現川西町）で多く栽培されていたことから、「結崎」の名が冠せられた葉ネギの一種。柔らかな食感と甘味が特徴。薬味の他に郷土食では「ぬた和え」として食された。

結崎ネブカの生産者、先祖からの種を受け継ぎ、復活の功労者でもある川西町の宇野正増さん。

結崎ネブカのふるさと
川西町

寺川・飛鳥川・曽我川などの河川が大和川に合流する地点にあり町全体が平坦な地形をしています。観世発祥の地として知られ、室町時代に翁の面と一束の葱が川に落ちていたことが結崎ネブカの始まりと伝えられています。江戸時代は木綿栽培が盛んで、明治以降は貝ボタンの地場産業が栄えました。

ヒトコト

おそらく僕たちの世代は、日本の農村文化を体現してこられた方々とつながりが持てる最後の世代となるでしょう。農家の皆さんに教わった大切なこと。それは古の大和を、日本の文化を訪ねる入り口でもあります。残る半生はその種火を、大切に守り育てていきたいと思っています。一粒万倍の実りをもたらす粟のように。（『家族野菜を未来につなぐ』より）

清澄の里　粟
奈良市高樋町 861
営 11:45 ～ 16:00 火曜定休
(完全予約制 20 名限定)

『家族野菜を未来につなぐ
レストラン粟がめざすもの』
三浦雅之・三浦陽子著
学芸出版社　1600 円

協力　三浦雅之＆陽子

発案からコーディネートまで おもてなしのゲストハウスから広がる 京終のにぎわいづくり

町屋ゲストハウスならまちオーナー　安西俊樹さん

空海が好きな安西さんは梵の書を飾る。「人を見たらおたいしさんと思えという言葉があってね。どんなボロを来た人でも大事にしようという文化やね」。
滞在していたロシア人の滞在者・アリーナさんが絵はがきに絵を描いて売ってくれた。この阿修羅はアリーナさんの作品。

奈良市京終（きょうばて）地区にある「町屋ゲストハウスならまち」は、奈良のゲストハウス界の草分け的存在だ。築100年と言われる古民家を改装したもので、経営する安西俊樹さんは京終地区のまちおこしの立役者としても知られている。有名企業の技術者であった安西さんが、なぜ、この地でゲストハウスを経営することとなったのか。チェックイン前の昼下がりにおじゃまをし、建物の由来や安西さんの思いを伺った。

●書道教室から芝居小屋 そしてゲストハウスへ

玄関からロビーに入った瞬間、すっと高い吹き抜けに目を奪われた。天井を見やると、梁にはライティング用のレールがはり巡らされている。「ここはね、前は芝居小屋やったんですよ」。前のオーナーはここで、『オーガニックシアターレストラン楽屋（がや）』という有機野菜の食事と前衛的な演劇が楽しめる空間を提供していました。「その楽屋さんの前は、書道家の田原雪山さんのお住まいでした」。田原さんは書道教室も開いており、何十年もの間たくさんの生徒が通ったという。

安西さんとならまちとの関わりを導いたのは、娘の真由美さんだ。2006年、彼女がならまちで「由庵（ゆうあん）」というカフェを始めた。海外留学や世界中を旅した経験を持つ真由美さんを訪ねて、由庵には海外からの来客が増えた。カフェの2階では、お客さんを無料で宿泊をさせたり、週末には各人がお得意料理を持ち寄るパーティも開いた。「娘はこれまいろんな国の人にお世話になってるんやから、返さないかんと思ってね」。安西さんも会社勤めの傍ら、週末などにお店を手伝った。仕事で英文を読むことはあっても、会話の機会はなかったそうだが、そこで自然と英会話力をアップさせてもらった。

その頃、京都ではゲストハウスの開設が急増していた。

「やっぱり、ちゃんと泊まれる場所が必要やしね、これはひとつの流れやな」と、安西さん自らゲストハウス経営に乗り出すことを決意。由庵で外国人たちとの交流を楽しみ、英会話力を磨きながら、じっくりと家捜しをした。そんな折、店じまいをする「楽屋」の後に入らないかと誘われた。平城遷都祭の前年、2009年のことだ。

●お接待への憧れが まちづくりの原点

芝居小屋からゲストハウスへの改修には数百万の資金が必要だった。土間を温かい木床に。ベッドや水回り。難色を示す奥様を「クイーンエリザベス号に乗って船で世界一周したと思ったらええやん」と説得した。「待ってたのは優雅な船旅ではなく、毎日の労働やったけど（笑）」。改装が終わった同年12月2日、安西さんは定年退職の日を迎えた。そして休む間もなく「町屋ゲストハウスならまち」をオープン。

現在でオープンして6年目。奥様も英語でのチェックインをこなすようになり、今では貴重な戦力だ。実に7割が海外からのお客様で、宿泊客のお国柄などもだいぶ見えて来たという。「世界中の方をお迎えするというのは、ほんとにうれしいことですね」。

生まれ育ちは香川県さぬき市。ご実家は87番札所「長尾寺」のすぐ近くで、お遍路さんたちの通り道だった。安西少年はおばあさんに促されて、お遍路袋にお米を入れるのが日課。「幼いころから、〝お接待〟が当たり前の生活でした」。

しかしサラリーマンになってからは、ライバル会社との開発競争に明け暮れた。「奈良に住んで40年。それやのに歴史や文化には縁がなくて。どこかで、そういうものに飢えていたんやね」。

京終地区ではもともと、「京終をなんとかしよう会」などのまちおこし活動が行われていた。そこに加わったのが根っからの「お祭好き」という安西さんだ。にぎわいの復活を願ってまちづくりに積極的に関わるようになった。

かつてここが芝居小屋だったことをしのばせるロビーの空間

●「京終さろん」で 町の歴史を語り継ぐ

その成果の1つが、手作りマップ「京終見どころ案内」だ。「ここに来るのに、（既存の）地図が分かりにくいって言われてね。みんな迷うんですわ」。地元の有志と一緒にまちを隈なく歩き回り、一軒一軒のお店の特徴や街角の小さなお宝などディープな情報をギュッと詰め込んだ。手描きの文字とイラスト満載のマップからは、お客さんを温かく迎えようという思いが溢れ出ている。

2015年12月で36回を数えるトークイベント「京終さろん」も、安西さんの発案だ。「この土地で長年、お互いに助け、助けられながら生きてきた人たちは、みんな心にいっぱい歴史をもっている」ことに気づいたのがきっかけ。「歴史を学び始めると、毎日通る道に新しい発見がある。ここに語り継ぐものがあると思ったね」。文化人、企業家、住職など、さまざまな世界で活躍する方をゲストに迎えてきた。

2014年春からは、駅前にもにぎわいを、とJR京終駅前での古本市「京終玉手箱」を開催している。そして、安西さんのチャレンジはそれだけにとどまらない。次は、老舗や個性のあるお店を回る京終めぐりを提案する「まちかど博物館」。「このまちのおもしろいところは、自分の生き甲斐やこだわりを持ったお店が多いところかな。誰でも何でもええというのではないんやね」。

さらには、近鉄奈良から京終まで続く道沿いに、もっとゲストハウスを増やしたいというゲストハウスロードプロジェクトも温めている。

＊　＊　＊

そろそろゲストハウスのチェックインの時間だ。京終の町は、一見、どこにでもあるような、ちょっと寂れた古い界隈に映るかもしれない。だが、実は時代の先頭を切るトップランナーではないかと感じた。

「お金では得られない、心の温かいものを大事にする時代とちゃいますかね」。少年時代にお接待に憧れた安西さんは、今日も海外からのお客様をとびきりの笑顔で迎える。

インタビュー・神野武美　大浦悦子　文・嶋田貴子

JR京終駅前で開催される古本市「京終玉手箱」は、本以外にもカフェや紙芝居なども交えた交流の場

道を訪ねる人が後をたたないことから生まれた「京終みどころ案内」はゲストハウスの表にも掲示されている。

旅人のチェックインを待つロビー

暮らしの自然療法

なんとなく不調を感じるとき、薬や病院に頼る前に、自然の力や自然治癒力により安らぎや楽しさをもたらしながら癒すホームセラピーを提唱されているクレメンツかおりさんに、誰もが取り入れやすい自然療法について紹介していただきます。

その1 冬の薬膳酒

クレメンツかおり　自然療法森の学校　校長

元旦には家族でお屠蘇を飲まれましたか？　お屠蘇は新年のお祝いと1年の無病息災のための薬酒。邪気を屠（ほふ）り、魂を蘇らせるという意味で〝屠蘇〟と呼ばれます。肉桂（シナモン）、陳皮（チンピ）（ミカンの皮）、山椒（サンショウ）、白朮（オケラ）、桔梗（キキョウ）、防風（ボウフウ）（※）などが入っており、薬局などで屠蘇散として売られていますが、私たちは自然療法の授業の中で自家製の屠蘇ブレンドを作ります（医薬品に入る生薬もあるので一部は他のもので代用）。お正月が過ぎたら、屠蘇茶として風邪予防、冷え対策に毎日飲んで健康に役立てます。シナモン、山椒、陳皮などの香りが気を巡らせ、本当に魂が蘇りそうです。お屠蘇は飲みにくいと思われている方も多いですが、このお茶は美味しいんです！　黒砂糖を少し入れると、より美味しくいただけますよ。

※防風は奈良県宇陀市大宇陀にある森の旧薬園にある、藤助防風が有名です。

クレメンツさんが自宅で常備する薬膳酒。キンカン、ユズ、レモンなどの柑橘類は、果皮に精油成分を持ち、抗菌、抗ウイルス、消化促進に役立ちます。また果肉にはビタミンCがたっぷりで疲労回復や免疫強化に一役買います。風邪の予防やひきはじめには、エルダーフラワーやエキナセアなどのハーブティに小さじ1杯混ぜるだけ。はちみつ浸けにしても重宝します。

女性の不調におすすめの、バラ、ジャスミン、紅花

滋養強壮には、クコ、竜眼、ナツメ

屠蘇茶

この冬は見た目にも楽しめて、体の芯からポカポカ、美味しくふわっ～とした気分になれる薬膳酒を作ってみませんか？

【作り方】

お好みの薬用食材（1種類）
クコの実やナツメ　約100g
焼酎　1リットル（25度以上）

1 清潔な密閉ビンと材料と焼酎を準備する。
2 ナツメは半分くらいにカットすると早く飲めます。クコの実はそのまま、紅花などは細かいので小さいお茶パックなどに小分けします。
3 容器に材料を全て入れて、密閉し、ときどきフタは開けずに混ぜながら浸けます。1ヶ月ほどで飲みごろに。
4 お好みではちみつを入れて、お湯割りなどでお飲みください。

※焼酎の代わりに清酒やジン、ホワイトリカーでも良いですがアルコール度数が低いと腐りやすいのでご注意ください。

【クレメンツかおり】
1984年フランスでアロマテラピーに出合ったことをきっかけに、色彩心理療法、気功療法、クリスタルヒーリング、フィトテラピーなど様々な自然療法を学ぶ。自然療法士養成校〝自然療法森の学校〟では、アロマテラピーを中心に、薬膳療法、鉱物療法、日本の薬草療法などのセミナーも開講。
http://morinogakkou.com

薬膳酒レシピのメディカルハーブは、自然療法森の学校でも購入できます。お問い合わせ TEL 0744-47-3484 MAIL info@morinogakkou.com

曽爾村のクラインガルテンてどんなところ？

19世紀のドイツで始まったクラインガルテンは、「小さな庭」という意味で、都市住民が自宅から通える場所に持つ農地のこと。それが曽爾村にもあるのをご存知ですか。

今年で13年目

曽爾村にはクラインガルテン曽爾という滞在型市民農園があります。川沿いから山の方へ上った南向きの斜面に位置し、30区画ある農地とラウベ（休憩施設）は、どこからでも村を見渡すことができます。利用者は、好きなときに滞在し、四季折々の壮大な景色を眺めながら畑作りや田舎暮らしを楽しんでいます。

このクラインガルテン曽爾は、平成15年にオープンし、今年で13年目になります。近県から訪れて週末に1泊2日滞在する方が多いですが、長期滞在する方もあります。東日本大震災時には東京や鎌倉からの申し込みが3組あったそうです。

これらの方々は、定年や早期退職により人生に一区切りついたタイミングにあり、インターネット検索でここを見つけられたとのこと。それまでは日帰りできる範囲内からの利用ばかりだったことを考慮すると、わざわざ奈良県曽爾村を選んだ理由には、やはり放射能の影響を心配する気持ちがあったのかもしれません。クラインガルテンを3、4年利用した後はそれぞれ宇陀市室生、京都府南部などに家を見つけて移って行かれたそうです。

村の住民との交流も

田舎暮らしを体験したい、自分で作った野菜を食べてみたい、ときには人間らしい暮らしのために…いろんな希望を持つ利用者さんたちにとって、利用者同士はもちろん、地域の人々との交流も楽しみの一つとなっています。

クラインガルテン曽爾では田植えに始まり、盆踊り、稲刈り、もちつき、忘年会など、田んぼや地域に関わるイベントが行われます。そこには利用者だけでなく、大字の総代さんや村長他、近所の人々も参加し、みんなで協力して準備から片付けまで行い、毎回大変盛り上がります。（ここだけの話、イベント時には曽爾高原ビールという、奈良県唯一の地ビールが飲み放題です。さらに、利用者はお亀の湯入浴がいつでも無料です。うらやましい！）

このようにクラインガルテン曽爾のおかげで利用者と地域の人々の交流も盛んになり、そのまま曽爾村に家をみつけ、移住した方も5組いらっしゃるそうです。

自然に囲まれた環境で、都会と地域の縁結びの場にもなるクラインガルテン。あなたも週末田舎暮らし、始めてみませんか？

クラインガルデン曾爾（運営＝財団法人曽爾村観光振興公社）http://www.soni-kogen.com/kurain.html

（レポート　山本早苗）

クラインガルテン曽爾
奈良県宇陀郡曽爾村大字小長尾地内
■1区画が約200㎡の土地に、
約43.2㎡のラウベ（休憩施設）あり。30棟。
■ラウベにはキッチン、風呂、水洗トイレ、ロフト付き　※耕運機、クワなどはレンタル有
■付帯施設…多目的広場、展示農園、管理棟
■利用料金・・525,000円(税込)/1年
1年契約で更新可能。※入居時補償金50,000円
◎ラウベを借りず畑だけを借りることも可能。
10区画（1区画各約50～100平方メートルの菜園）利用料金・・55000円(税込)/1年

編集局より…

中近世ヨーロッパの都市は、田舎的なものを徹底的に排除した人工的で過密な空間で、不衛生になっていましたが、近代にはこれを改造して広大な森林を造成し、自然美に溢れる地域社会を作るようになりました。ドイツ語圏の人々は森の中で過ごすのが大好き。ミュンヘンは自らを「100万人の村」と誇るそうです。
クラインガルテンは、19世紀の産業革命によって経済的に苦しむ町民を救うため、領主が農園を与えたことが発祥です。これが広まり、第一次世界大戦、第二次世界大戦を経る苦難の中で、クラインガルテンはドイツ人を救いました。今もドイツでは居住地に近い市街地内にクラインガルテンがあり、都市住民と自然を結んでいます。

捨てられそうなものを今の暮らしにもういちど。

メグ（恵古箱店主）

vol.3

古い道具にむきあうのとおなじ気持ちで。

ちいさな車での
移動販売をしていた頃から
今もずっと大切にしているひとつに
素敵なご縁からつながったモノヅクリをなさる方が
ひとつずつていねいにつくられたお品たちがあります。
見逃してしまいがちな
捨てられそうな素材が
その方の知恵と工夫で
「世界にひとつだけのもの」としてよみがえっていく姿に
どうしても惹かれてしまう自分がいるのです。

たとえば
時代の流れと共に使用しなくなっている
ちいさな豆電球からつくられた
「ランプマン」と名付けられた
真鍮素材のキャラクター

たとえば
珈琲豆屋さんから大量にでる
麻袋からつくられた
鍋敷きやコースターなどの台所小物

たとえば
もうじき枯れてしまいそうな
葉や実の枝からつくられた
くるっとまるめただけのリース

そんなふうにして
捨てられそうな素材に命をふきこんで
よみがえらせてくれる
モノヅクリをなさる方の
発想の柔軟さに感動と尊敬をしてしまうのと同時に
きっと彼らは
わたしが古い道具にむきあっているのとおなじ気持ちで
モノヅクリをしてくださっているのだろうなと想えてきて
うれしくなってしまうのです。
そして、自分の暮らしを
たいせつになさりたいお客様が
その品を手に取られる瞬間にいあわせられることを
とてもうれしく感じるのです。

この気持ちは　古道具だけの活動をしていた頃には
あじわうことができませんでした。

こうして　年月をへて
自分をいれる器のかたちも
変化してきていることを感じながらも

わたしはこれからも
すてられそうだった
築50年の古いおうちで
モノヅクリの方の手からうまれる
すてられそうな素材からうまれた
愛おしいお品たちを　たいせつにしていきます。

【恵古箱】葛城市内にある築50年の一軒家で、古道具、雑貨、ギャラリー、カフェ、学びの企画を展開するショップ。　http://ekobacouti.exblog.jp

奈良県産材 CLT工法による ビル今春竣工

本誌21号の「森とともに生きて」でも紹介されていたCLT（クロスラミネーティッドティンバー）。集成した板を互いに直交するように重ねた大型のパネルです。構造材としての強度と寸法の安定性があり、耐震・耐火性にも優れ、工程がシンプルで工期も早いのが特徴で、欧米では10階建ての高層ビルも建てられています。そんなCLT工法による、日本初の5階建て福祉ビルがこの春、奈良市内に誕生します（1階はRC）。

CLTは、中質材も強度があれば素材として無駄なく生かせるもので、戦後に植林され利用期を迎えている国産材の需要の拡大に寄与するものとみられています。

ビルを建設しているのは、障害ある人の「はたらく」を支援している社会福祉法人ぷろぼの。理事長の山内民興さんによると「障がいのある人や職員、地域の人たちにも、自然にもやさしいビルを建てたい」と思っていたところへ、「設計士さんからCLTを勧められ、市内に木造の建造物が建つ意義を考えて、採用を決断した」そうです。

ぷろぼの福祉ビルのCLTは十津川産。これを岡山県真庭市にある製造工場へ運び、集成したパネルを再び奈良市新大宮にある建設地へ搬入して建てられます。一階には地域の人たちも憩い集える食堂、五階には地域の方々も利用できる多目的ルームを設い、障害福祉事業だけではない地域の交流の場として活用できるとのことです。

さとび的読書さんぽ

サルたちが教えてくれること

読書さんぽナビゲーター　嶋田 貴子

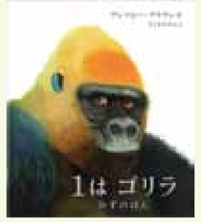
昨年の夏をにぎわせたSEALsの若者たちの政権批判、みなさま覚えてらっしゃいますでしょうか？　格差を警鐘したピケティのブームはまだ過ぎさっていませんよね？　情報が猛スピードで飛び交う時代だからこそ、腰を落ち着けてじっくり読書。そして、今年は「申年」ということで、こんな本を。サルのふり見てわがふり直せ!?　ヒトの姿も、ちょっと違った視点で眺めてみたり。

『サル　その歴史・文化・生態』では、『裸のサル』のデズモンド・モリスが、古今東西、ヒトとサルがどんな風にかかわってきたのかを軽妙に解説。神様と崇められるサル、王妃のペットにされるサル、動物実験に利用されるサル（…なんてことを！）。画家が描いたサルなど図版も豊富。奈良町の町屋にぶらさがる身代わり申の写真も。

『道徳性の起源』
フランス・ドゥ・ヴァール / 著
紀伊国屋書店

『サル』
デズモンド・モリス／著
白水社

『社会はなぜ左と右にわかれるのか』
ジョナサン・ハイト / 著
紀伊国屋書店



『１はゴリラ』
ネルソン松原／著
アンソニー・ブラウン / 作
岩波書店

『道徳性の起源　ボノボが教えてくれること』は、道徳は理性や神様が生んだのではなく、霊長類の進化からボトムアップ的に誕生したものだと説いた一冊。ボノボは、ヒトにもっとも近い霊長類。コミュニケーションを重視し、おだやかで融和的。つまり、いいやつなんです。

『社会はなぜ左と右にわかれるのか　対立を超えるための道徳心理学』は、サルではなくヒトの道徳の本ですが、合わせてどうぞ。リベラルが負けてしまう理由を教えてくれます。

『1はゴリラ　かずのほん』は息抜きに。2はオランウータン、3はチンパンジー。じっと、こちらを見つめるまなざし。そして、最後は…。ゴリラが大好きな作家アンソニー・ブラウンの絵本です。

「俚志」編集局のある京終界隈を散策してみます！

京終（きょうばて）かいわい散歩

その7

ご縁をつなぐ小さな寺　瑾城寺（れんじょうじ）

下間景子さん

瑾城寺はよほど注意深く見ないとその場所がわからない小さなお寺であるが、その歴史は深く、一説によると、地名（紀寺町）の由来である「紀寺」ではなかったかともいわれている。「瑾城寺縁起」には、聖武天皇発願、行基菩薩開基とあり、その後、紀有常（きのありつね）が再興したとして紀寺（紀氏の菩提寺）とも呼んだとなっている。学術的にはまだまだ解明されていない部分が多く、謎とロマンに満ちたお寺である。

ご住職の下間（しもま）景甫（景子）さんは、18年前に夫の下間和甫住職が一年余りの闘病生活の後亡くなられ、お寺を継ぐことに。それまで裏方に徹しておられたことから、お寺をどのように守っていけばいいのか途方に暮れていた時、ご主人の知り合いの方から、お寺の歴史を調べてはとのアドバイスをいただき、「瑾城寺通信」の発刊に繋がっていった。

さらに、亡き義父が「良寛さんのように生きたい」といっていたのを思い出し、寺がかつてのように誰でも気軽に立ち寄っていただけるお寺として地域に根づくことを使命としている。

「蓮城寺通信」と編集長の野尻幸男さん

年中行事はもちろん、9月には2009年に始めた大人の月見会、ミニギャラリー、落語会「れんじょうじ寄席」、8年前からは大阪樟蔭女子大学による発掘調査、そして毎月第3曜日に開催される「京終さろん」（21ページ参照）の会場にと、昔の寺子屋はこんな風だったのかと想像してしまうお寺なのである。

（取材・文　大浦悦子）

SATOBI COLUMN

愛する十津川村を元気にしたい！と、学生たちが動きだしています！

十津川村プロジェクト

とつぷろ。

大阪大学 地域おこし団体 とつぷろ。
高成 壮磨（大阪大学理学部2年）

２０１４年の秋に行われた、大阪大学の環境イノベーションデザインセンター（ＣＥＩＤＳ）のフィールドワークで、奈良県十津川村神納川（かんのがわ）地区を訪れたときある思いが芽生えた。それを機に法学部から経済学部、工学部、外国語学部など様々な専攻から学生が集まり、村おこしという課題に取り組み始めたのが、私たち「とつぷろ。」だ。

神納川地区には世界遺産の一部である小辺路（こへじ）があり、古くから巡礼路として多くの人々を受け入れてきた。初めて訪れた「よそ者」であるはずの私たちも優しく受け入れもてなしてくれた。そんな人々の温かさが、神納川にはある。こうしてできた神納川地区の方々との「つながり」が専攻や関心も違う我々を結び、活動の原動力になっている。

神納川地区でも、他の多くの地域社会に見られるように過疎化や高齢化が進み伝統や文化が存続の危機に陥りつつある。人々のあたたかみの残る、私たちが愛するこの地域を、失いたくない。この地域に寄り添い、互いに元気を与え合えるような関係を作っていきたい。私たちはそう強く願っている。この気持ちに突き動かされた「とつぷろ。」が行ってきた活動や今後のビジョンについて、次回以降紹介していきたい。

エコツアー in 川上村！ 冬のイベント情報

川上村地域おこし協力隊 竹中 雅幸

以前、俚志 vol.19 特集「地域おこし協力隊活躍中」に掲載していただきました、川上村地域おこし協力隊の竹中と申します。大学山岳部で登山を始め、卒業後は登山ツアー専門旅行社に就職。2014 年 6 月に、着地型の観光に携わりたくて、そして山に住んでみたくて川上村へやってきました。2015 年 4 月より、川上村においてエコツアー事業に取り組んでいくプロジェクトとして、「川上村エコツアー推進プロジェクト " 山遊び塾 ヨイヨイかわかみ "」を始めました。現在はモニターツアー期間中で、毎月違うタイプの様々なエコツアーイベントを行っています。今回は冬の間のイベントをご紹介させていただきます。よければぜひ、川上村に遊びにきてください。

★ 1 月のイベント

「冬の天然洞窟探検ツアー こうもり観察会と“おくどさん”体験」

日時：平成 28 年 1 月 31 日 (日)
集合：10:00 川上村役場前
解散：15:00 頃 川上村役場前
料金：大人 5,000 円／こども 2,500 円
対象：小学生以上

観光地化されていない天然の洞窟をご案内。NPO 法人東洋蝙蝠研究所理事・細川慎太郎さんをお招きし、洞窟内で越冬するこうもりの生態や観察のマナーについて学びながら洞窟を探検します。その後、創業 130 年の老舗旅館・朝日館にて、昔ながらの " おくどさん "（カマド）を使った炊飯体験を行います。

★ 2 月のイベント

「氷瀑めぐりツアー」

日時：平成 28 年 2 月 7 日 (日)
集合：10:00 川上村役場前
解散：16:00 頃 川上村役場前
料金：大人 5,000 円／こども 2,500 円
対象：小学生高学年以上

大小さまざまな氷瀑を求めてのスノーハイキング。林業地である川上村ならではの工夫 " 木蝋 " で暖をとったり、ご飯をつくったりもします。昔ながらの生活の知恵を楽しみながら学びましょう。冷え込みの厳しいこの時期ならではの、冬の恵みを楽しみます。

★ 3 月のイベント

「筏場道ハイキング ～秘湯の野湯・五色湯を探せ！～」

日時：平成 28 年 3 月 5 日 (土)
集合：10:00 川上村役場前
解散：16:00 頃 川上村役場前
料金：大人 5,000 円／こども 2,500 円
対象：小学生以上

古道「筏場道」をたどるハイキング。筏場道が切り開かれた経緯、大台ヶ原や林業との関連を交えながら、江戸時代の湯治跡「五色湯」を訪ねます。

各ツアーの詳細・お申し込み・お問い合わせは、Web サイト「山遊び塾 ヨイヨイかわかみ Web サイトまで。[ヨイヨイかわかみ] で検索を！

編集後記

東日本大震災から5年の節目を迎える今年、あらためて3・11が奈良にもたらしたことを知りたいと思った。

阪神淡路大震災時にはなかった「放射能」が、被災者にもたらした想像以上の影響により故郷を離れざるを得なくなり、それは住処を捨てるのみでなく、コミュニティを捨てる苦しみが伴ったこと。そして、奈良の地での草の根支援とは、「震災を忘れない」、「日常生活の中でできる事を継続する」ことが大切なこと、そこから、支援者自身のまわりにも新たなコミュニティが生まれることを知った。

心に残った言葉は、「被災者支援で大切なのは、自分の色を持たないことで、一人ひとりの希望に合わせて最大限の支援をすること」である。これは奈良県被災者の会代表の高橋周介さんの言葉。

「さとびごころ」として、何かを伝えられたのではないかと、爽やかな新年を迎えたしだいです。（忞）

次号のお知らせ

25 号（2016 年春号）
4 月 10 日発行予定

特集 奈良の古い建物の保存活用術（仮題）

古い建物がリノベーションされ、あたらしい役割をもって再生するケースが増えています。そこには、どんなプロセスがあったのでしょうか。財団やＮＰＯ、個人など地元住民の活躍を中心に地域おこしのための古民家・古建築の再生例を取り上げます。

編集局のある京終で古本市♪ 入場無料

第９回 京終玉手箱

まほろばステーション 一箱古本市＋あるふぁを開催します。
【日時】 2016 年 3 月 13 日（日） 11 時～ 16 時
【場所】 ＪＲ京終駅（きょうばてえき）
お問い合わせ 京終玉手箱事務局 0742-27-6538

さとびごころ vol. 24 2016 年1 月10日発行

発 行	地域研究会 俚志 http://satobigokoro.org/ 〒630-8322 奈良県奈良市北京終町 24 の 2 TEL＆FAX 0742-94-6805 Email satobigokoro@gmail.com
発行人	大浦悦子
編 集	さとびごころ編集局
印 刷	共同プリント株式会社
編集デザイン	オフィス エルインク

俚志をお求めの方は発行元まで直接ご連絡くださいませ。

俚志は以下のスポットでもお求め頂けます 俚志販売スポット

奈良市	**ちちろ** 南半田西町 18－2 奈良女子大近く TEL0742-27-3130
	葉音（ぱおん） 後藤町 12－2 奈良女子大学近く TEL0742-27-5972
	奈良人権・部落解放研究所 大安寺 1-23-1 奈良県解放センター内 TEL 0742-62-5179
	ナチュラルポエム村夢りんご JR 京終駅前
	五ふしの草 市内循環「油阪商店街」バス停 船橋商店街内 TEL 0742-24-2807
	ほっとねっと 市内循環「北京終町」バス停すぐ TEL0742-94-6800
	豊住書店 奈良市東向北町 TEL0742-22-8500
橿原市	**県立奈良医科大学労働組合** 県立医大本館 3 階 TEL 0744-22-3501(内 2222)
	自然療法森の学校 橿原市久米町 738-101 0744-47-3484
	奈良むつう整体院 橿原市今井町 4 丁目 11－54 TEL 0744-21-8088
桜井市	**（有）より愛** 生田（ログハウス「菜の花さんの家」）TEL 090-5678-8917
宇陀市	**宇 UDDA 陀** 奈良県宇陀市大宇陀迫間 56-1 090-3658-2041

俚志は以下のスポットでご覧頂けます

奈良県内

■奈良市	ならＮＰＯセンター 蔵武 D 町屋ゲストハウスならまち ごはんや 小道の店 社会福祉法人ぷろぼの IT インクルージョンセンター 菊岡漢方薬局 益久染織研究所 奈良三条店 ならまち菓子工房プティ・マルシェ カフェ バルドー ゲストハウス奈良日和り ナガノカメラワーク ぽかぽか工房 井上本店（イゲタ醤油） COTOCOTO NEW 本田整骨院 NEW いち屋 NEW あらんの家 NEW 茶房・てん NEW Vanam（カレー） NEW 璉珹寺
■大和郡山市	中島医院 彩食キッチン Bon 菊茶店
■大和高田市	NPO 法人 もちつもたれつ NPO 法人 マーマの里 レストラン 咲咲（ささ）
■天理市	子育てサロン「Salon de kid's」 NEW ぽかぽか工房
■桜井市	三輪座 マジックマレット わらしべ長者の里 泊瀬長者亭 森本組
■磯城郡田原本町	居酒屋おふくろの味 おいで
■橿原市	通所介護事業所デイサービス 花の家 伝統食カフェ～楽膳～
■高市郡明日香村	アトリエ夢灯り
■宇陀市	NPO 法人 八木福祉会 デイサービス にこにこ ふるさと元気村 件－kudan－(丼の店) ろぐ空（KARAPPO） 伊那佐郵人 NEW 報恩寺
■葛城市	恵古箱
■五條市	ぱあく（手作りハムの店） NEW 五條 源兵衛
■吉野郡東吉野村	古民家カフェ月うさぎ
■吉野郡野迫川村	野迫川村立高野豆腐伝承館

奈良県外

■東京都目黒区	益久染織研究所 東京中目黒店

さとびごころ Vol.24
2016年1月10日発行　購読料　500円(別途送料150円)　定期購読　年間2,000円(送料別　500円)
発行　地域研究会「俚志」　〒630-8322　奈良県奈良市北京終町24の2　TEL&FAX　0742-94-6805　E-mail satobigokoro@gmail.com
定価500円
地域研究会「俚志」発行

俚志をご支援いただいているお店の紹介です

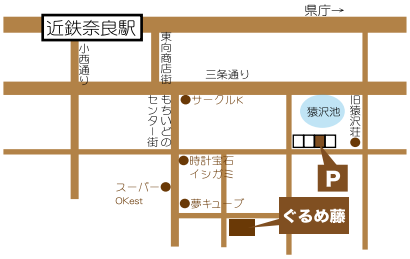
元祖奈良酒かすラーメンの店

清酒発祥の地のおいしい酒粕を使って、手間暇かけるラーメンは、昼時の賑わいの後、1時過ぎから出される。
とんこつ醤油と酒粕のスープに、もやしやチャーシューなどで飾っただけのシンプルな、スープに自信ありのラーメン。そんなラーメンをほんわかとした雰囲気のお店で味わってみてはいかがですか。

「ぐるめ藤」は奈良町の餅飯通り、夢キューブの南角を入ってすぐのところにある。ママの鎌田真理子さんは辻クッキング講師経験者で美味しい料理が自慢。お昼時は近くのサラリーマンでにぎわう。もちろん昼定食もおすすめです。
酒かすラーメン 650円
定食 650円（コーヒーとお菓子付き）

御食事処＆居酒屋
ぐるめ藤

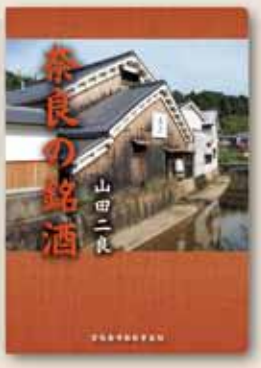
〒630-8373 奈良市南市町16番地-1
TEL 0742-22-4043
【営業時間】昼：11:30〜15:00
夜：18:00〜23:00
【定休日】日曜日（祝祭日は営業）Ⓟ1台



［奈良本］専門・京阪奈情報教育出版の本　Tel:0742-94-4567　http://narahon.com/

第18回 日本自費出版文化賞 大賞受賞！

このたび、当社が編集・印刷・製本・流通までお手伝いした本が自費出版界の大賞を受賞しました！
自費出版のお手伝いもしております。



歴史・民俗・宗教・文学、まちづくり・・・日本文化の担い手、奈良発信の本づくり

さとびごころ 読者メンバーズ（定期購読）のご案内

【購読料】　年間2,000円　（＋送料500円）
【お振込先】　ゆうちょ銀行から　14510-16113441　地域研究会「俚志」
他銀行から　店名 四五八（ヨンゴハチ）　店番 458　普通預金　口座番号 1611344　地域研究会「俚志」

お申し込み・お問い合わせ
satobigokoro@gmail.com
TEL&FAX… 0742-94-6805